

大保毎々遺跡

福岡県小郡市大保所在遺跡の調査

小郡市文化財調査報告書 第223集

2007

小郡市教育委員会

序

本書は、小郡市大保において計画されましたアパート新築工事に先立って、小郡市教育委員会が実施しました大保毎々遺跡の発掘調査の記録です。

調査地は、小郡市のほぼ中央を南北に貫流する宝満川の西側、小郡市大保に所在します。大保には式内社である御勢大霊石神社があり、関係する地名も多く、古くから集落として生活が営まれていた事がうかがえます。今回の遺跡名である「毎々（めいめい）」も御勢大霊石神社とゆかりのある地名で、元来は舞々と書き舞を舞う場所としての意味を持っていると考えられています。また、弥生時代の遺跡である大保横枕遺跡や中世の大保龍頭遺跡、大保西小路遺跡など多くの地点において調査が行われ、多くの遺構や遺物が確認されてきました。

今回の調査では、中世と近世の土地や建物を区画する溝や土坑が確認され、土師器や陶磁器、石器、瓦などが出土し、周辺の遺跡や御勢大霊石神社との関連が注目されます。

この様に埋蔵文化財は、地域の歴史を明らかにするうえで欠かす事の出来ない貴重な文化遺産です。本書が文化財に対するご理解、さらには教育及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたりご協力いただきました地権者の森山嘉範氏及び発掘調査に従事された地元の方々をはじめ多くの方々にご理解とご協力いただきましたことに厚く感謝いたします。

平成19年3月31日

小郡市教育委員会
教育長 清 武 輝

例 言

- 1、本書は、アパート建築工事に伴い、森山嘉範氏より委託を受け小郡市教育委員会が発掘調査を行った大保毎々遺跡（おび まいめい）の報告書である。
- 2、調査期間は、平成17年6月6日から同年7月1日まで実施した。
- 3、調査面積は、約303㎡である。
- 4、本調査は、柏原孝俊、沖田正大が行った。
- 5、現地遺構実測及び遺構全体図の作成は、馬田妙子、衛藤知嘉子、近藤佳奈、田中悠美子、百嶋八千代、山田和子、吉田あや子、柏原が行い、製図は吉田が行った。
- 6、遺構の個別写真及び遺跡全景写真の撮影は柏原・沖田が行い、遺物の撮影は布文化財写真工房 岡紀久夫氏に委託した。
- 7、遺物の復元は、佐々木智子、田鍋桂子、百嶋が行い、実測は沖田が行った。
- 8、本書に記載した遺構略記号は、D：溝、K：土坑、P：柱穴である。
- 9、遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
- 10、遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
- 11、本書の執筆と編集は、沖田が行った。

本文目次

第1章 調査に至る経過と組織	1
1 調査に至る経過	1
2 調査組織	1
3 調査の経過	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の内容	4
1 概要	4
2 溝状遺構	5
3 土坑	11
4 柱穴	11
5 里道	12
第4章 まとめ	13

挿図目次

第1図 調査範囲図 (S=1/2,500)	2
第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	3
第3図 遺構配置図 (S=1/200)	4
第4図 SD-1平・断面図 (平面図S=1/60、断面図S=1/40)	5
第5図 SD-2石列平面図 (S=1/20)	6
第6図 溝状遺構出土遺物実測図 (1はS=1/2、他はS=1/3)	6
第7図 SD-2平・断面図 (平面図S=1/60、断面図S=1/40)	7
第8図 SD-3平・断面図 (S=1/40)	8
第9図 SD-4・6平・断面図 (S=1/60)	9
第10図 SD-5平・断面図 (S=1/40)	10
第11図 SD-7平面図 (S=1/40)	10
第12図 1区調査区北壁東端SD-1・4・6土層図 (S=1/40)	11
第13図 土坑出土遺物実測図 (S=1/2)	11
第14図 SK-1平・断面図 (S=1/40)	12
第15図 里道平面図 (S=1/60)	13

図版目次

図版1 1区全景(西から)、2区全景(西から)、SD-1全景(南から)、1区調査区北壁東端部土層SD-1・4・6切り合い状況(南から)、SD-2全景(南から)、SD-2石列検出状況(東から)、SD-2土層(1区調査区北壁・南から)、1区SD-4・6完掘状況(南から)	
図版2 SK-1土層(1区調査区南壁・北から)、里道全景(北から)、出土土器、出土石器	

第1章 調査に至る経過と組織

1. 調査に至る経過

森山嘉範氏所有地である小郡市大保1044、1056他においてアパートの建設が計画され、平成17年2月7日付で森山嘉範氏の代理として大東建託㈱より埋蔵文化財の有無についての照会文書が小郡市教育委員会文化財課に提出された。原因がアパート建設工事であり基礎が深くなることや周辺に大保西小路遺跡や大保龍頭遺跡が存在することから、平成17年2月22日にトレンチ2本を設定し試掘調査を実施した。試掘調査の結果、敷地のほぼ全域に埋蔵文化財の所在が確認された。試掘の成果をもとに協議を行った結果、全敷地（141804㎡）のうち建物部分（約407㎡）において調査を実施することとなった。

調査は、建物が2棟となることから2区に分け、遺構密度等を再確認した結果、実質約303㎡において実施した。

調査期間は、平成17年6月6日（月）から同年7月1日（金）までである。

2. 調査組織

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝
教育部長 高木 良郎
文化財課 課長 高木 良郎（H17.4.1～H17.6.30課長兼任）
田籠千代太（H17.7.1～）
係長 大石 義行（調査当時）
片岡 宏二
主査 粕原 孝俊（調査担当）
嘱託技師 沖田 正大（調査担当）

発掘従事者

田中展代、谷口眞子、松本スマ子、森本智慧子、森山富江

3. 調査の経過

調査の経過を調査日誌より抜粋する。

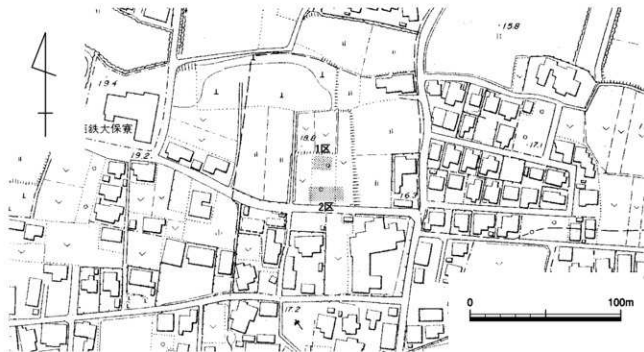
平成17年6月6日（月）晴れ、重機による表土剥ぎ開始、調査開始。6月7日（火）晴れ、作業員による掘削開始、1区壁面精査、1区D-1掘削。6月8日（水）晴れ、1区D-1・D-2・K-1掘削、D-2石列を検出。6月9日（木）晴れ、1区D-2・K-1・2区D-2掘削、杭打ち。6月13日（月）晴れ、2区D-2・3・柱穴・攪乱掘削、1区遺構全体図（S=1/20）作成。6月14日（火）晴れ、2区D-4掘削。6月15日（水）晴れ、2区D-4・5・6掘削。6月16日（木）晴れ、1区全景・D-1・2全景撮影、2区D-4～6（S=1/20）実測、1区K-1・D-4掘削。6月17日（金）晴れ、2区西側拡張。6月20日（月）晴れ、2区D-4・6貼床掘削。6月23日（木）晴れ、2区D-7・D-4東側柱穴群・攪乱掘削。6月24日（金）晴れ、2区里道掘削、調査区全景撮影。6月29日（水）曇り時々雨、1・2区遺構全体図（S=1/20）作成。6月30日（木）曇り時々雨、実測終了。7月1日（金）晴れ、調査区埋め戻し、調査終了。

第2章 位置と環境

大保毎々遺跡は、小郡市大保1044、1056、1057-1、1058、1059、1064-1に所在する。本調査地は、小郡市のほぼ中央を南北に貫流する宝満川の右岸、三国丘陵から派生する中段段丘上に位置する。

本調査区を含め周辺には、「毎々」、「東小路」、「西小路」、「南小路」、「北小路」、「龍頭」、「弓場」など式内社である御勢大霊石神社と関連の深い地名が多く残っている。本遺跡名にも用いた「毎々」は三沢地区にある「舞々」と地続きであり同義であったが村が異なる事から文字や読みを変えたと考えられ、また大保地区で最も高地になっており御勢大霊石神社に奉納する舞を舞った場所ではないかと想定されている。この様に本調査区の所在する大保地区は、集落発生の起源は明らかではないが御勢大霊石神社が鎮座し古くから集落として生活が営まれていたことがうかがえる地域である。

本調査地周辺は、三国丘陵及び同丘陵から派生する台地などに多くの遺跡が所在する。旧石器時代においては、三国丘陵や宝満川の対岸に所在する花立山などに遺跡が分布し、宝満川右岸では津古内畑遺跡や津古上の原遺跡、横隈井の浦遺跡(6)、三沢逢ヶ浦遺跡(7)、一ノ口遺跡(9)、三沢栗原遺跡(14)、横隈山遺跡(13)、北平田遺跡(12)、三国小学校遺跡(15)、西島遺跡(16)など多くの遺跡で旧石器が確認されている。縄文時代では、三国丘陵上に位置する三沢北中尾遺跡(10)や北松尾口遺跡(11)において落し穴状遺構が確認されている。弥生時代になると遺跡数も増加し、大保地区の北に隣接する力武地区では力武内畑遺跡(17)において前期の井堰が確認され、弥生時代の農耕の様子も確認されている。また、大保地区においても大保横枕遺跡(26)において甕棺墓群が確認されている。古墳時代には、三国丘陵上に三沢逢ヶ浦遺跡が所在し、埴輪窯による埴輪の生産が行われ、同丘陵上に所在する菊又地区においては甕窯が確認され須恵器生産が行われていた事も確認されている。また、三国丘陵を含め周辺は、三沢古墳群や津古生掛古墳(4)、津古1号墳(2)、津古2・3号墳(3)、横隈山古墳(8)、三国の鼻1号墳(5)など古墳が多く築かれた地域である。古墳時代終末期から奈良・平安時代においては、小郡地区に小郡官衙遺跡(29)が所在し7～8世紀代の掘立柱建物群が確認され筑後国御原郡の官衙跡と推定されている。大保地区で調査された大保西小路遺跡(21)や大保龍頭遺跡(20)では、中世の区画溝や土坑などが確認され、大保西小路遺跡においては輪の羽口が数基の土坑から15点出土し、中世に鉄生産が行われていた事が想定される。また、三沢権道遺跡(19)においても中世の土坑や溝、掘立柱建物を出し、陶磁器や土師器、石器、木器などと共に鉄滓が出土している。本調査地は、三沢権道遺跡東側に近接し、中世の区画溝や土坑、近世の溝が検出され遺物量は少ないものの土師器や陶磁器などが出土している。この様に大保地区及びその周辺は、時代により遺跡の密度に差はあるものの旧石器時代より人々が生活し文化財の豊富な地域である。





第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

- | | | | | | |
|-------------|------------|-------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 大保毎々遺跡 | 2. 津古1号墳 | 3. 津古2・3号墳 | 4. 津古生跡古墳 | 5. 三国の鼻1号墳 | 6. 横隈井の浦遺跡 |
| 7. 三沢蓮ヶ浦遺跡 | 8. 横隈山古墳 | 9. 一ノ口遺跡 | 10. 三沢北中尾遺跡 | 11. 北松尾口遺跡 | 12. 北牟田遺跡 |
| 13. 横隈山遺跡 | 14. 三沢栗原遺跡 | 15. 三國小学校遺跡 | 16. 西島遺跡 | 17. 力武内強遺跡7 | 18. 三沢寺小路遺跡 |
| 19. 三沢権道遺跡 | 20. 大保龍原遺跡 | 21. 大保西小路遺跡 | 22. 吹上二ツ塚遺跡2 | 23. 下鶴古墳 | 24. 吹上二ツ塚遺跡 |
| 25. 大保荒古遺跡 | 26. 大保横枕遺跡 | 27. 井上庵寺 | 28. 小部若山遺跡 | 29. 小部官街遺跡 | 30. 兼助堂東遺跡 |
| 31. 井上兼助堂遺跡 | 32. 上若田遺跡 | 33. 大板井遺跡 | 34. 小部大保道遺跡 | | |

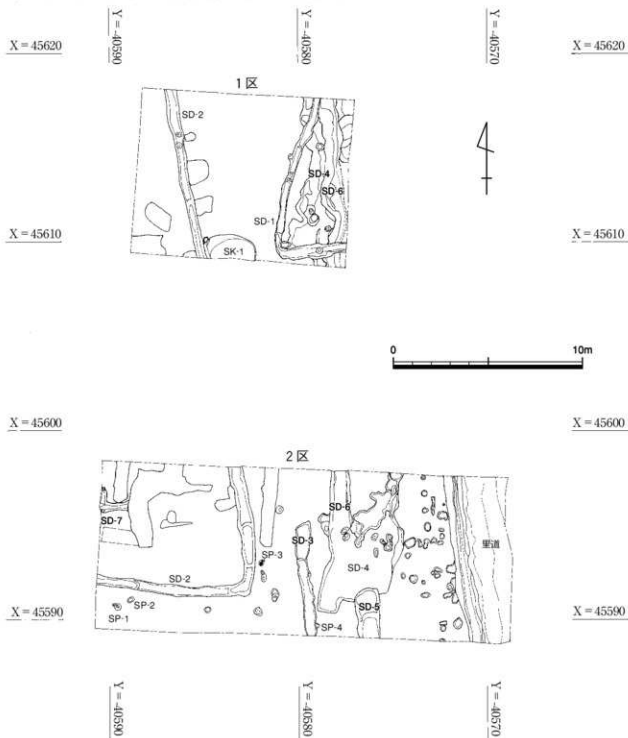
(※図中の番号は、本文内の番号と一致)

第3章 調査の内容

1. 概要

調査地は、標高16.18～17.31mに位置する。調査地は、大保地区において最も高地に位置するが、周辺土地より1m近く削られ駐車場等に利用されていた為、遺構の残りは良いものではなかった。

調査は、盛土を行った上で掘削が遺構検出面に達する建物部分のみにおいて実施した。そのため2区画に分かれる事となり、調査地の北側の区画を1区、南側の区画を2区とした。調査地は、三国丘陵から南東に向かい派生する中位段丘上に位置し、東側は三国丘陵側の台地と花立山から派生する台地に挟まれ宝満川が南北に貫流する谷底平野となっている為、1区・2区ともに東および南東に向かい緩やかに傾斜する。



第3図 遺構配置図 (S=1/200)

基本層序は、1・2区ともに表土の下、地山となるが1区は黄褐色、2区灰黄褐色を呈する。

遺構は、1・2区ともに地山上面で検出し、中世及び近世の区画溝2条を含め溝状遺構7条、土坑1基、里道、柱穴である。

遺物は、溝状遺構より染付小碗、須恵器坏蓋、土師器皿、土師器碗、土鍋、投彈、黒曜石剥片、土坑より土師器皿、黒曜石剥片が出土したほか、里道より陶磁器や瓦、ガラス瓶、柱穴より黒曜石剥片などが出土した。

2. 溝状遺構

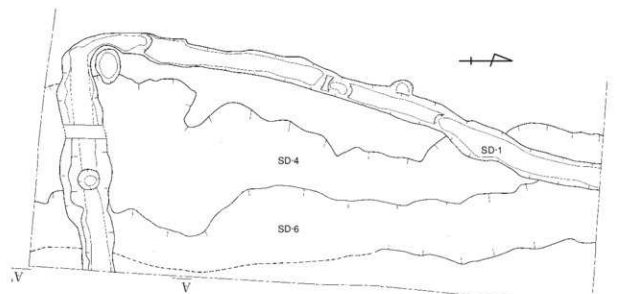
SD-1 (第4・12図、図版1)

SD-1は、1区東側でL字状に検出した。調査区北壁より南に伸び調査区南壁直前で東に曲がり調査区東壁にあたる。規模は、南北方向長さ8.75m、東西方向長さ3.4m、最大幅0.82m、最小幅0.34m、深さ(最深部)0.22mである。本来の規模は検出規模よりも大きかったものと思われ、調査区東壁土層では最大幅1m、深さ0.38mを確認できる。床面は、3箇所に浅い段がつくもの、ほぼ平坦で南東に向かい緩やかに傾斜する。断面は、逆台形を呈する。SD-1内の埋土堆積状況は、削平により調査区北壁では、にぶい黄褐色土1層の堆積のみだが、調査区東壁においては灰黄褐色土が3層にわたり若干の起伏はあるものの水平に堆積している。

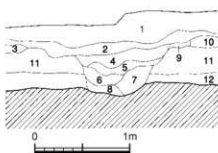
SD-1からは、近世と思われる磁器碗が出土しており、近世における区画溝と思われる。

出土遺物 (第6図、図版2)

1は、染付小碗である。全体の1/3程度の残存状況で、口径6.4cm(復元推定)、底径3cm、器高3.45cmである。胎土は白色を呈し、全体に透明釉による施釉が施され、外面に口唇部から胴部中ほどにかけて淡青色から濃青色の呉須により着色されている。軸割ぎは高台端部にのみ行われ、砂目が若干残る。



A, H=17.400m



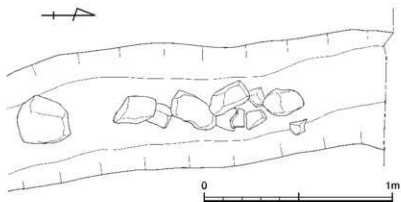
1. 表土
2. 10YR4-2灰黄褐色土に黒褐色土ブロックが5%混ざる
3. 10YR5-2灰黄褐色土に黒褐色土ブロックが10%混ざる
4. 10YR3-1黒褐色土に灰黄褐色土ブロックが10%混ざる SD-1埋土
5. 10YR4-2灰黄褐色土 SD-1埋土
6. 10YR5-2灰黄褐色土 SD-1埋土
7. 10YR3-2黒褐色土 SD-1埋土
8. 10YR4-1弱灰色砂質土 SD-1埋土
9. 10YR3-1黒褐色土
10. 10YR5-2灰黄褐色土
11. 10YR3-2黒褐色土に明黄褐色土粒が10%混ざる
12. 2.5Y3-3黄褐色砂層に明黄褐色土粒(5cm大)30%、弱灰色色砂質土ブロック10%が混ざる SD-1床床

第4図 SD-1平・断面図(平面図S=1/60、断面図S=1/40)

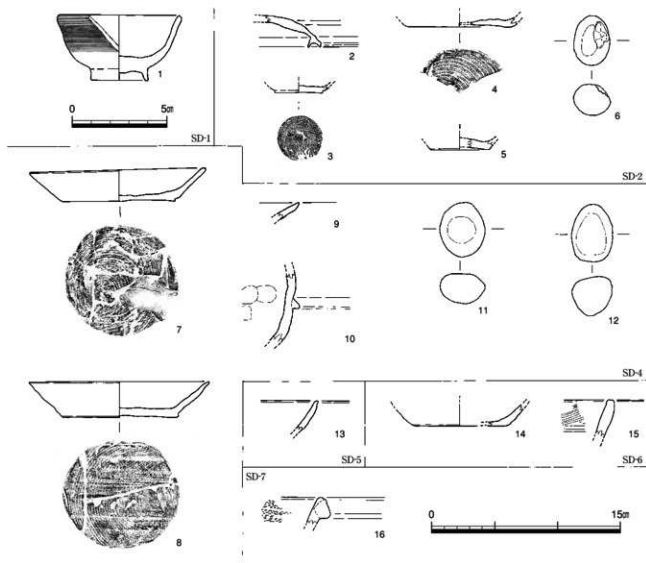
SD-2 (第5・7図、図版1)

SD-2は、1・2区に跨りL字状に検出した。1区北壁から南に伸び2区中央より若干南寄りの地点で西に屈曲し2区西壁にあたる。1区検出部分では、南北方向長さ9.2m、最大幅0.68m、最小幅0.46m、深さ(最深部)0.37mであり、床面はほぼ平坦で緩やかに南に向かい傾斜し、中央部よりやや南側で1段の段が付く。2区検出部分では、南北方向長さ6.9m、東西方向長さ8.2m、最大幅0.9m、最小幅0.45m、深さ(最深部)

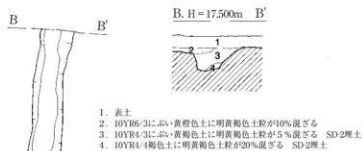
0.42mを測る。床面は平坦であるが、2区検出部全体で4段の段が付き、屈曲部よりやや北側の段落ち部分が最も深くなる。断面は、逆台形を呈する。1・2区及び区画間の推定部分を合わせると南北方向で約27mとなり、さらに北に伸びる事から、大規模な区画を行っていた区画溝であることが想定できる。また、1区検出部の北側において床面よりやや浮いた状況で、10~30cm前後の礫を用いた石列を確認したが、用途は不明である。時期は、出土した土師器埴や皿より中世と思われ、須恵器の坏蓋も出土しているが流れ込んだものと考えられる。



第5図 SD-2石列平面図 (S=1/20)



第6図 溝状構出土遺物実測図 (1はS=1/2、他はS=1/3)



配置図 (S = 1/800)



第7図 SD-2平・断面図 (平面図S = 1/60, 断面図S = 1/40)

出土遺物 (第6図、図版2)

2は、須恵器坏蓋である。口縁部の残りが悪いので口径復元は出来なかったが、残存幅4.75cm、残存高2.45cmを測る。胎土は灰色を呈し、 $\phi 1\text{mm}$ 以下の砂粒を含む。

3は、土師器碗の底部片である。底径は、3.7cmを測る。胎土は精良、焼成は良好であり、にぶい黄橙色を呈する。体部は内外面ともにナデ調整を施し、底部には糸切り痕が残る。

4は、土師器皿の底部片である。復元による推定底径は、8.1cmを測る。胎土には、 $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、橙色を呈する。体部は内外面共にナデ調整を施し、底部には糸切り痕が残る。内面に黒斑状に黒色になった部分があり灯明皿として使用された可能性も考えられる。

5は、土師器皿の底部片である。復元による推定底径は4.6cmを測る。胎土には、 $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 程度の砂粒を極少量含む。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。内面及び底部側面はナデ調整であり、底部には糸切り痕が残る。

6は、石製投彈である。全長39.5cm、最大幅2.9cm、重さ35.2gを測る。色調はにぶい黄橙色を呈し、石材は安山岩である。

SD-3 (第8図)

SD-3は、2区中央付近で南北方向に検出した。調査区南壁にかかる。規模は、長さ6.08m、最大幅0.7m、最小幅0.52m、深さ(最深部)0.12mを測る。床面は、1段の浅い段落ちを有し、全体的には平坦で緩やかに南に向かい傾斜する。遺物は、確認されなかった。

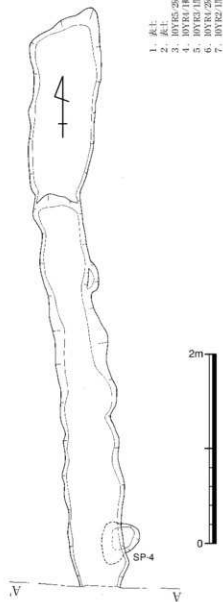
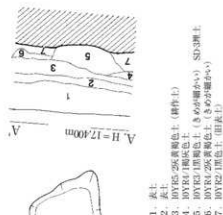
SD-4 (第9・12図、図版1)

SD-4は、1・2区に跨り南北方向に検出した。SD-1・5・6に切られる。1区では、調査区東・南・北壁にかかるため全様はつかめないが、検出規模は、長さ8.85m、幅3.1m、深さ(最深部)0.74mである。2区においても調査区北壁にかかるが、長さ7.6m、幅3.96m、深さ(最深部)0.21mを測る。床面は、地山を掘削した後に貼床を施し平坦に仕上げている。貼床の厚さは10cm前後である。地山には、部分的に掘り込まれ土坑や柱穴状になっている部分も見られるが、深さも浅く貼床により埋められている状況から土坑や柱穴としての取扱ではなく、溝を築いた段階で掘られた凹凸の様である。2区検出部の床面は、地山面、貼床面ともに平坦であるが、1区検出部においては調査区東壁に向かい傾斜し深くなった後に平坦になると思われる。

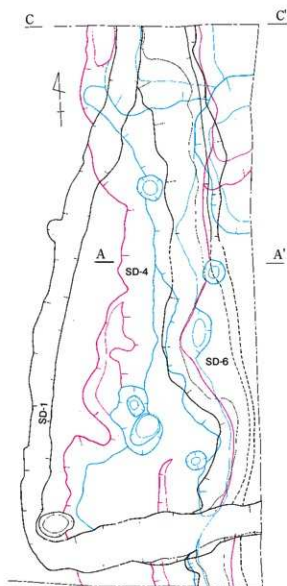
出土遺物 (第6図、図版2)

7は、土師器皿である。底部の残りは良いが、口縁部の残りは悪い。口径は、底径や底部からの立ち上がりの角度に合わせ復元し13.9cmを測る。底径は8.9cm、器高2.65cmである。胎土には、 $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 程度の砂粒を含み、焼成は良好である。内面は浅黄橙色、外面は灰黄褐色を呈する。外面底部側面から口縁部内外面は横方向のナデ、底部内面はナデによる調整を施す。底部は、糸切りで糸切り痕が残る。中世の所産と思われる。

8は、土師器皿である。口縁部の残りは悪く、口径は底径や口縁部の立ち上がり角に合わせ復元し、14.3cmを測る。底部は楕円形を呈し、底径は長軸方向9.1cm、短軸方向8.6cm、底部厚は中央部で0.6cmを測る。器高は2.85cmである。胎土は精良、焼成は良好であり淡黄色を呈する。調整は、内外面共に体部は回転ヨコナデ、内面底面はナデによるものである。底部には、糸切り痕および板状圧痕が残る。中世の所産と思われる。



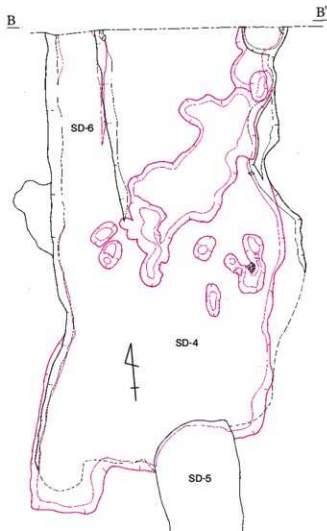
第8図 SD-3平・断面図 (S=1/40)



A. H = 17,300m



1. 10YR3/1黒褐色土に明黄色土粒が2%混ざる SD-6埋土
2. 2.5Y6/3にふい黄色土に黒褐色土ブロックが20%混ざる SD-6埋土
3. 2.5Y6/3にふい黄色砂質土に明黄色土粒が20%混ざる SD-4埋土
4. 2.5Y7/4浅黄色砂質土に黄褐色ロームブロック (大) が30%混ざる SD-4埋土
5. 10YR3/1.5黒褐色土に明黄色土粒が5%混ざる SD-4埋土
6. 10YR4/3にふい黄褐色土に明黄色土粒が5%混ざる SD-4埋土
7. 2.5Y5/3黄褐色砂質土にふい黄褐色土ブロック (小) が20%混ざる SD-4埋土
8. 2.5Y7/4浅黄色ロームブロックに黒褐色土ブロックが5%混ざる SD-4埋土
9. 10YR3/1黒褐色土に明黄色土ブロック (小) が10%混ざる SD-4埋土
10. 10YR6/4にふい黄褐色土に黒褐色土ブロックが30%混ざる SD-4埋土



B. H = 17,500m



1. 表土
2. 10YR3/1黒褐色土にふい黄褐色土粒が10%混ざる SD-6埋土
3. 10YR3/1黒褐色土にふい黄褐色土粒が5%混ざる SD-6埋土
4. 10YR3/1黒褐色土にふい黄褐色土粒が20%混ざる SD-6埋土
5. 10YR3/1黒褐色土にふい黄褐色土粒が20%混ざる SD-6埋土
6. 10YR4/2黄褐色土に明黄色土ブロックが30%混ざる SD-6埋土
7. 10YR3/1黒褐色土にふい黄褐色土粒が20%混ざる SD-6埋土
8. 10YR4/2黄褐色土にふい黄褐色土粒が10%混ざる SD-4埋土
9. 10YR3/1黒褐色土にふい黄褐色土ブロックが20%混ざる SD-4埋土
10. 10YR2/1黒褐色土に暗褐色土粒が20%混ざる SD-4埋土
11. 10YR6/3にふい黄褐色砂質土に明黄色土ブロックが2%混ざる SD-4埋土
12. 10YR5/3にふい黄褐色土に黒褐色土粒が20%混ざる SD-4埋土
13. 10YR3/1黒褐色土に明黄色土ブロックが10%混ざる SD-4埋土
14. 10YR4/2黄褐色土に黒褐色土ブロックが10%混ざる SD-4埋土
15. 10YR5/3にふい黄褐色土に明黄色土ブロックが10%混ざる SD-6埋土
16. SD-6陥床
17. SD-4陥床

配置図 (S = 1/800)



第9図 SD-4・6平・断面図 (S = 1/60)

9は、土師器皿の口縁部片である。残存高1.3cmの小片である。胎土は、精良でにぶい橙色を呈する。焼成は、良好である。内外面ともにナデ調整を施す。

10は、土鍋の胴部片である。胎土は、精良で内面灰色、外面浅黄橙色を呈する。内面は指押しえ後ナデ、外面は横方向のナデ調整を行い、中位に断面三角形の突帯が一条廻る。

11は、石製投弾である。全長4.35cm、最大幅3.55cm、重さ43.4gを測る。色調は灰白色、石材は安山岩である。貼床内からの出土である。

12は、石製投弾である。全長4.5cm、最大幅3.25cm、重さ57.5gを測る。色調は灰白色、石材は安山岩である。貼床内からの出土である。

これらの他に、長さ4.1cm、幅3.45cm、重さ28.4gの黒曜石の石核、長さ3.55cm、幅2.5cm、重さ7.6gの黒曜石剥片も出土している。

SD-5 (第10図)

SD-5は、2区中央部南側で南北方向に検出した。調査区南壁にかかりSD-4を切る。検出した規模は、長さ2.63m、幅1.33m、深さ0.1~0.16mである。床面は、平坦であるが南に向かい落ちる段を1段有する。また、床面には、貼床が施されていた。

出土遺物 (第6図、図版2)

13は、土師器碗の口縁部片である。胎土はφ1mm程度の砂粒を極少量含み、にぶい黄橙色を呈する。土器表面は、灰黄褐色を呈する。焼成は良好で、内外面共に横方向のナデ調整を施す。

SD-6 (第9・12図、図版1)

SD-6は、1・2区に跨り南北方向に検出した。SD-11に切られ、SD-4を切る。埋土がSD-4と良く似ており、切り合いが明確ではなかった為、土層により切り合いの確認を行った。検出した規模は、1区で長さ9m、幅1.08m、深さ(最深部)0.42m、2区で長さ3.05m、幅1.2m、深さ(最深部)0.3mを測る。2区においては貼床を検出しており、貼床除去後の深さは最深部で0.39mを測る。

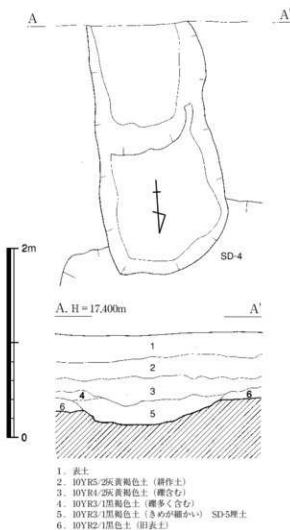
出土遺物 (第6図、図版2)

14は、土師器皿片で胴部から底部にかけて残る。底径は、7.6cm(復元推定)を測る。胎土はφ1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は、良好で橙色を呈する。内外面共にナデ調整で、底部はヘラ切りの可能性があり、切り離し後に底部の縁にのみナデ調整を施している。

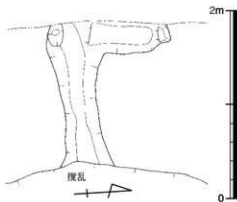
15は、土鍋か鉢の口縁部片である。胎土にはφ1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は、ややあまく、表面がにぶい黄橙色、胎土中央が灰色を呈する。外面は摩耗し調整は不明であるが煤の付着が見られる。口唇部にはナデ、内面にはハケメ調整を施す。

SD-7 (第11図)

SD-7は、2区西端で東西方向に検出した。西側は調査区にかかり東側は攪乱に切られる為、長さ1.5mのみの検出にとどまり、調査区壁面直下で北側に1段あがり1.3m伸びるものの全様は定かではない。東西方向に伸びる部分における幅は、0.35~0.6mを測り、深さは最深部で0.26mである。南北方向部分は調査区にかかるため幅は確認できないが、深さは0.17mを



第10図 SD-5平・断面図 (S=1/40)



第11図 SD-7平面図 (S=1/40)

測る。

出土遺物 (第6図、図版2)

16は、土鍋の口縁部片である。胎土には $\phi 1\text{mm}$ 程度の砂粒を含む。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。外面および口唇部には横方向のナデ、内面にはハケメ調整を施す。口縁部は、四角形に近い粘土帯を貼り付ける事により断面が三角形に近い口縁を作り出している。

3. 土坑

SK-1 (第14図、図版2)

SK-1は、1区で検出した。南側は調査区にかり、西側は擾乱およびSD-2に切ら、全様は明らかではないが、楕円もしくは隅丸方形に近い平面形を呈するものと思われる。検出した規模は、東西方向2.75m、南北方向1.27m、深さ(最深部)0.92mを測る。床面は、ほぼ平坦であり南に向かい若干の傾斜をみせる。埋土は、水平方向もしくは斜め方向に堆積し、人為的に埋め戻したのではなく埋土が西側より流れ込んだものと思われる。

出土遺物 (第13図、図版2)

1は、土師器皿の底部片である。小片の為、底径は復元できなかったが、底部残存幅は1.2cm、残存高は1.7cmを

測る。胎土は、橙色を呈し、 $\phi 1\text{mm}$ 以下の砂粒を少量含む。焼成は、良好である。内外面共にナデ調整を行い、底部には糸切り痕が残る。

2は、土師器皿の底部小片である。底径の復元はできなかったが底部残存幅0.95cm、残存高1.2cmを測る。胎土は、にぶい黄橙色を呈し、 $\phi 1\text{mm}$ 程度の砂粒を極少量含む。焼成は、良好である。内外面共にナデ調整を行い、底部には糸切り痕が残る。

これらの他に、長さ5.9cm、幅2.95cm、重さ306gの黒曜石の石核も出土している。

4. 柱穴

柱穴は、1区においてはSD-1屈曲部東側で検出した1基にとどまり、他は2区において検出した。2区では、多数検出したものの遺物が伴うものは少なく、建物として並ぶと思われる柱穴も確認出来なかった。ここでは、遺物が伴うもののみ記載する事とする。

SP-1

SP-1は、2区南西端近くで検出した。径37cm、下端径5cm、深さ45cmを測り、上端から25cmほど下がった位置に1段テラスを有する。

SP-2

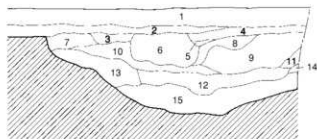
SP-2は、SP-1の北東側、約45cmの地点で検出した。平面形は楕円形に近い形状を呈し、上端長軸方向で35cm、短軸方向で25cm、下端長軸方向20cm、短軸方向15cm、深さ13cmを測る。底面は、平坦である。

SP-3

SP-3は、2区SD-2屈曲部東側で検出した。平面形は楕円形に近く北東側が狭くなる。長軸方向39cm、短軸方向27cm、深

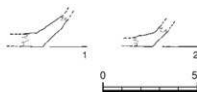
C. H = 17500m

C'

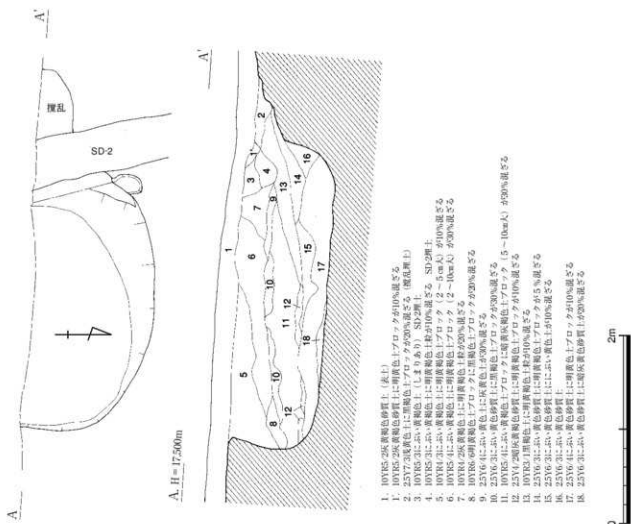


1. 表土
2. 表土
3. 10YR5/3にぶい黄褐色土(均質、きめが細かい) SD-1埋土
4. 10YR4/2灰黄褐色土に黒褐色土ブロック(小)が20%混ざる
5. 10YR2/1黒土にぶい黄褐色土粒が20%混ざる
6. 10YR2/1黒土に明黄褐色土粒が5%混ざる SD-6埋土
7. 10YR4/2灰黄褐色土に黒褐色土ブロック(小)が20%混ざる
8. 10YR2/1黒土にぶい黄褐色土粒が10%混ざる SD-4埋土
9. 10YR3/2黒褐色土に褐色土粒が20%混ざる(下層に褐色水鉄鉱が沈着する) SD-4埋土
10. 10YR4/2灰黄褐色土に明黄褐色土粒が30%混ざる SD-4埋土
11. 10YR5/3にぶい黄褐色ロームに灰黄褐色土ブロックが10%混ざる SD-4陥床
12. 2.5Y6/3にぶい黄色砂粒に明黄褐色ローム土ブロックが20%混ざる SD-4陥床
13. 10YR6/6明黄褐色ロームに灰黄褐色土ブロックが30%混ざる SD-4陥床
14. 10YR5/3にぶい黄褐色ロームに灰黄褐色土ブロックが20%混ざる SD-4陥床
15. 2.5Y5/3黄褐色砂粒に明黄褐色ローム土ブロック(5cm大)30%、暗灰黄色砂質土ブロックが10%混ざる

第12図 1区調査区北壁東端SD-1・4・6土層図 (S=1/40)



第13図 土坑出土遺物実測図 (S=1/2)



第14図 SK-1平・断面図 (S=1/40)

さ20cmを測る。内部に2段のテラスを有する。

出土遺物 (図版2)

図化するに至らないが、長さ2.3cm、幅1.5cm、重さ2.8gの黒曜石剥片が出土している。

SP-4

SP-4は、SD-5西端部で検出した。SD-5に西側半分を切られる。平面形は隅丸三角形を呈し、南北方向44cm、東西方向42cm、深さ6cmを測る。底面の平面形は隅丸方形を呈し、平坦である。

出土遺物 (図版2)

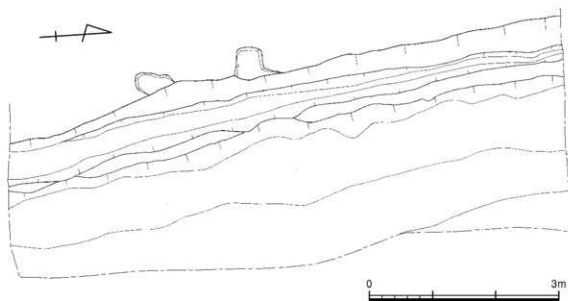
図化するに至らないが、長さ3.05cm、幅1.75cm、重さ2.8gの黒曜石剥片が出土している。

5. 里道 (第15図、図版2)

里道は、2区東端部で南北方向に検出した。東側および南北両端は、調査区にかかる。検出した規模は、長さ8.9m、深さ(最深部)0.59mを測る。西壁直下に沿う様に1条の側溝を有する。側溝の幅は最大部で0.6m、最小部で0.4m、深さ0.19mを測る。この里道は、昭和27年調製の「大保字圖」を含め昭和27年以前の地図に記載されている里道にあてはまり近代まで使用されていたものと思われる。

出土遺物は、染付けの皿や碗蓋の他「粉末 ナイス」と書かれた赤毛染めのガラス瓶などであるが、図化するにはい

たらなかった。



第15図 里道平面図 (S=1/60)

第4章 まとめ

今回の調査において確認した遺構のうち、多くを占めるものは溝状遺構である。中でもSD-1、SD-2はそれぞれ近世および中世の区画溝であり、特にSD-2は1区・2区に跨り確認しており、今回の調査対象から外した調査区の間を合わせると南北方向に約27m、東西方向に8.2mとなる。これは、SD-2により区画された東側の一部でしかなく更に南北方向は北側に、東西方向は西側に伸びると思われ、また調査地から100mほど西側に位置する三沢権道遺跡においてSD-2に繋がると思われる溝は検出されていないことから、東西方向に伸びる部分に関しては調査地の西側に接する畑内で再度北に向かい屈曲し、方形もしくは長方形に土地を区画すると考えられ、かなり広い土地を区画していたものと思われる。また、調査地は周辺より1mほど削平を受けているにも係らず溝の底面を確認している事から深さも本来は1m前後あったものと思われる。

調査地の所在する「毎々」は、先述したように東側に近接する御勢大霊石神社との関係が想定される地名であり、奉納の舞が舞われていた土地であったと考えられる事から神事等を執り行った施設が設置されていた事も考えられる。また、西鉄大牟田線をはさみ西側には三沢権道2遺跡や三沢寺小路遺跡があり同様に中世の遺構が確認され、特に三沢寺小路遺跡は14世紀に大保原合戦の死者を弔う為に建立された善風寺の跡地と推定され、今までに善風寺の痕跡は確認されていないものの区画溝などが確認される他、本調査地の南西300mの地点にある大保西小路遺跡においても中世の遺構が確認されている。この様に、周辺は中世の遺構が多く確認されている地域である。

今回検出したSD-2の性格や区画内の内部構造は、西側の一段高くなっている畑部分の調査が行われた後に御勢大霊石神社や善風寺、周辺遺跡との関係を考慮した上で再度検討する必要がある、今後の調査成果が期待されるものである。



1区全景 (西から)



2区全景 (西から)



SD-1全景 (南から)



1区調査区北壁東端部土層
SD-1・4・6切り合い状況 (南から)



SD-2全景 (南から)



SD-2石列検出状況 (東から)



SD-2土層 (1区調査区北壁・南から)



1区SD-4・6完掘状況 (南から)

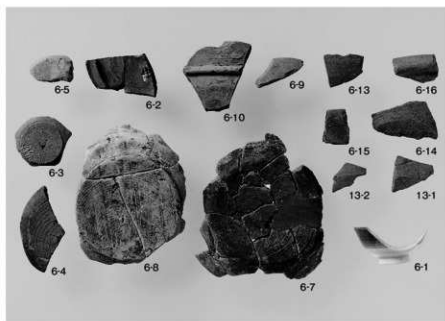
図版2



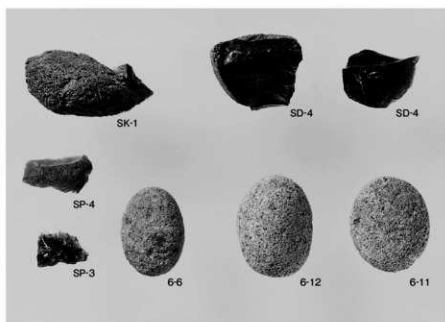
SK-1土層（1区調査区南壁・北から）



里道全景（北から）



出土土器



出土石器

報告書抄録

ふりがな	おおほめいめいせき							
書名	大保毎々遺跡							
副書名	福岡県小郡市大保所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第223集							
編著者名	沖田正大							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 TEL 0942-75-7555							
発行年月日	2007年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大保毎々遺跡	小郡市 大保1059他	40216		33° 24′ 38″	130° 33′ 49″	2005.06.06 ～ 2005.07.01	303㎡	アパート建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大保毎々遺跡	集落	中世 近代		溝状遺構7条 土坑 1基 柱穴		土師器 瓦 陶磁器 黒曜石剥片		中世及び近世の 区画溝を確認した

大保毎々遺跡

小郡市文化財調査報告書
第223集
平成19年3月31日

発行 小郡市教育委員会
小郡市小郡 255 - 1

印刷 隣報社写真印刷(株)
福岡市中央区天神 6-4-16
城戸ビル 3F